



Title	リスク社会とエコロジー問題
Author(s)	川野, 英二
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 65-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12137
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

リスク社会とエコロジー問題

川野 英二

〈要旨〉

ドイツの社会学者U・ベックが提起した「リスク社会」の概念によって、近代化過程と自然破壊の関係を明らかにすることができると思われる。ベックによれば、現代社会では富の分配の論理に代わって、リスクの分配の論理が支配的になりつつある。リスクの時代では、近代化の結果が無意識に生み出したグローバルなリスクが産業近代の制度そのものを脅かしているのである。

確かにベックのリスク社会の理論は興味深く、影響力が大きなものであるが、いくつかの難点を持っている。彼は個人化の過程で社会階級が解体されつつあると論じているが、それは単純化しすぎである。これに対して、R・マーフィーは個人化過程ではなく環境階級という概念を導入している。またアレクサンダーは、ベックが客観的なリスクとリスクの知覚の間のタイムラグを媒介する文化的要因を認めていないと批判している。

われわれの議論は、ライフスタイル集団を形成する連帯個人主義は生活態度の個人化の文化的特性であるというものである。パーキングの連帯個

人主義は、個人化過程のなかで、制度の外部で生じる新たな規範的強制の文化形成に焦点を当てている。個人化された個人はポスト伝統的な共同体へ反省的に加わり、エコロジカルなリスク意識は其中で増大するであろう。

キーワード

リスク社会、リフレクシブモダニゼーション、U・ベック、エコロジー、連帯個人主義

1 はじめに

十九世紀は社会問題の時代であったが、二十世紀は自然の問題の時代である、とかつてモスコビツシは説いたが、今世紀もあと数年を残すだけであるにも関わらず、この言葉がどれだけ社会学においてアクチュアルなものとみなされたかは疑わしい。確かに近年では地球環境問題はとりわけマスメディアや自然科学で大きく取り上げられ、一般的な関心が高まってきているが、社会科学とりわけ社会学において、エコロジカルな問題が理論にもたらしたインパクトはそれほど大きなものではなかったといえるだろう。しかも、いわゆる「環境問題」に関して経験的研究の蓄積は増大している一方で、理論の側ではエコロジカルな問題はそれほど考慮されてはこなかった。例外的に、グローバルなエコロジ問題を踏まえうえて近代化論を新たに構築している試みとしてベック、ギデンズ、ラッシュュらのリフレクシブニゼーション論をあげることができよう。彼らに共通している考え方は、近代はこれまでの素朴な産業主義的近代観にもとづく社会的な発展の段階からリフレクシブな段階へと移行しつつあり、その際エコロジカルな問題が重要な役割を果たしているというものである。現代は、近代化の背後に潜んでいた暗い側面が表面化しつつあり、近代化の過程が生み出した副次効果としてのリスクを近代そのものが対象化する「再帰的」段階に到達しようとしているのである。「リスク社会」^①は、ベックが提起したもの

であるが、彼はこの概念によって、近代化の過程によって生み出されたリスクが社会を新たな形態へと変えてしまいつつあるということを示そうとしている。リスク社会におけるリスクとは、人間によって作り出された、あるいは近代化の発展の結果として生じる、被害の大規模なリスクのことである。ベックは具体的には原発事故、遺伝子操作、食物に混入した有害物質などの例を挙げているが、われわれはさらに最近話題になっている薬害や大震災の例を付け加えることができるだろう。産業社会の発展によってわれわれはとりわけ物質的な恩恵を授かってきたし、科学技術の進歩を通して快適な暮らしを約束されてきた。しかしその後は産業生産の過程で引き起こされた有害物質、環境破壊などによって近代化の成功とともにその過失も現れてきている。こうした理由から、われわれはすでに近代化を素朴に信じてはいない。近代化の明るい光よりも暗い陰の部分が姿を現わし、われわれはそれに目を向けつつある。近代化の過程で意図せず生み出されたリスクの中でも、われわれはとりわけエコロジカルなリスクに注目したい。というのもこの種のリスクは人間と自然との関係そのものを問い直すきっかけを与えているからである。人間がこれまで自由に加工し、支配することができると信じていた自然との関係は、エコロジカルなリスクの発見によって予期しない形で自然が人間社会のなかへ入り込むことが知らされたことから、根本的に問い直されることになったのである。これまでの社会学は社会環境にのみ注目し、「自然」もしくは「自然と社会との関係」^②についてはあまり考慮に入れてこなかった。従来は社会の外

部とみなされ、注目されてこなかった自然は、汚染された自然、つまりエコロジカルなリスクとして社会の内部に再び入り込み、社会制度はこの新しく問題になった脅威に対応するために変容を迫られつつある。近代化の暗い部分として無視されてきた問題に新たな光が向けられている現在、自然の問題に対しても目を向ける必要がある。エコロジカルな問題は、近代化の副次的効果が新たに社会変化の原動力となると考えるベックのリスク社会論のなかでとりわけ重要な位置を占めている。しかしながら、ベックのリスク社会の理論は新たな社会批判のあり方を提示しているという面では非常に魅力的なものであるけれども、同時にいくつかの難点をも持っているように思われる。われわれはこうした点を考慮しながらこの理論をさらに発展させる方向性を探ってみたいと思う。

2 産業社会からリスク社会へ

脱産業社会や消費社会、ポストモダン社会など、現代社会を形容する言葉はこれまで数多く生まれてきた。ベックにとつては現代社会は近代化の過程で意図せざる副次的結果として生じた様々なリスクに覆われた「リスク」社会である。ポスト産業社会といわれることにちの現代社会は、決してポストモダンな社会なのではなく、むしろ近代化をより徹底化させる歴史的段階に到達している。いわばこれまで近代化と同義とみなされてきた産業社会は中途半端にしか近代化を遂行してこなかった、つまり「半分は近代で半分は封建」

社会だったのである。その代表的な例は雇用と家庭内労働という二つの相補的な労働形態である。雇用は近代的な形態であり、家庭内労働はアンチ近代なものであるにも関わらず、これらは産業社会のなかで互いに結びついていた。産業的社会秩序は、個人の自由と平等という近代の分割不可能な原理を分割し、一方の性には生まれによってその原理を認め、もう一方の性にはそれを認めていなかった。つまり産業社会は封建的な基盤にもとづいていた。産業社会は確かに伝統社会の集团的帰属から人々を解放したけれども、近代化の原理はいまだに徹底化されたわけではない。産業社会に内在している近代化の不徹底さは伝統社会から受け継いだものというよりもむしろ、産業社会そのものが生み出したものであり、またその封建的側面が産業社会を支えていたのである。しかしながら、現在では、近代化の原理と産業社会の現状は重なり合っていない。むしろその原理は産業社会を通り越している。今や脱伝統の対象は前近代から続く伝統ではなく、産業社会そのものの中で生まれた「伝統」なのである。伝統社会の生活様式や労働形態は十八世紀から十九世紀にかけての転換期にすでに解体してしまったが、こんにちでは社会階級や階層、核家族とそこにおけるこれまでの男女の分業、規格化された仕事が解体されつつある。社会階級や階層、核家族など近代初期において発展した産業社会の形態を表わすカテゴリーは、近代化がさらに発展した後期になると、まさにそれ自体が伝統的なものになり、近代化の過程そのものによって解体される。現在生じつつあるのは、近代化の原理を産業主義によって分割したり、産業的

形態にすることに對して近代化原理を擁護すること、言い換えれば、「近代をたえず自己に適用することで産業的近代の自己限定、自己批判、自己改革」を行なうことである。リスク社会の理論では、社会変化の過程は伝統から単純な近代、それからリフレクシブな近代へと進むものとみなされる。リフレクシブなモダニティとは、産業社会の近代化の背景をなしていた条件とカテゴリーの秩序を近代化そのものが変える段階のことである。後期近代は、前期近代の発展の結果とその過失が姿を現わし、近代社会自身がそれを問題化し克服せざるをえない時代なのである。

リフレクシブなモダニティは「製造された不安定性」、「グローバル化」、「個人化」の三つの原理から構成される^③。第一の原理である「製造された不安定性」は、必ずしも我々の存在が個人的あるいは集団的レベルでより不安定になったということの意味しているわけではない。産業技術的發展の結果、リスクの出現の形態とその規模が確実に変わった。例えば、自然災害や原子力アクシデントなどの大規模リスクは、従来の産業リスク、すなわち収入の減少や支出の増大をもたらす疾病、老齢、失業などこれまで保険制度によってカバーされてきたリスクとはちがって、個人補償の可能性を越えてしまっている。社会的、自然的条件への人間の介入の結果、われわれは自らの存在の不安を生み出したが、それだけではない。これは産業社会の進歩についての合意を維持してきた「保険契約」をも脅かしているのである。

第二の「グローバル化」は単なる経済現象ではなく、また世界シ

ステムや世界社会の出現と同一視することはできない。グローバルなメディアコミュニケーションや大量輸送の可能性の結果として時間と空間の関係が変化していると同時に、リスクもグローバル化する。グローバル化するのは多くの人々が積極的に求める「社会的財」だけではなく、多くの人々が否定的なものとして避けようとする「社会的悪」もまたそうである。大規模リスクはある特定の国だけの問題ではない。それは近代国家の国境を越えて周辺の国々にも影響を及ぼす。またそれは人体に世代を越えた長期的な影響を及ぼす。グローバル化したリスクは空間や時間を容易に飛び越える。グローバル化の過程では世界規模のネットワークが形成されるだけではない。我々の日常的活動は次第に地球の裏側で起こっている出来事に影響され、反対にローカルなライフスタイルは世界規模の効果もち、世界的に普及していく。日常的な活動のなかで引き起こされた環境汚染は世界的に広がり、逆に商品に対する厳格な環境基準は流通システムの変化をともなう。

第三の「個人化」の過程では、階級意識やエスニックアイデンティティ、進歩信仰など特定の集団に起因する産業社会のアイデンティティや意味が枯渇、解体し、さらには脱魔術化される。アイデンティティは特定の集団への帰属には基づかなくなるため、あらゆる定義づけの試みは個人そのものに課せられることになる。そのため彼らは自らを自分の生活の計画や態度の中心に据えざるをえない。自らを同一化しようとする集団やアイデンティティをも含めて、誰もが様々な選択肢のなかで選択しなければならない。階級や家族な

どの集団が解体し変化するなかで、個々人が自ら社会的アイデンティティを選択し、変えるなかでリスクを背負わなければならなくなる。こうした意味で個人化とは、ライフスタイルや生活形式の変化と分化を意味し、それは伝統的な集団的カテゴリーの背後にある階級や資産などの考え方と対立する。

ここに人々は地位の安定や宗教的コスモロジーから解放され産業社会の世界へといたるのではなく、むしろ国民国家を基盤とする産業社会からグローバルなリスク社会へと進むうとしていたのである。人々は様々に対立するグローバルで個人的なリスクをもった生活に直面しつつある。とりわけエコロジカルなリスクはこれら三つの特徴を備えているといえるだろう。エコロジカルなリスク、例えば環境汚染は国境を容易に乗り越え、階級や民族などの境界を越えて個人レベルに及ぶとともに、現行の保障制度によって補償することが困難である。このように、リフレクシブ・モダニゼーションにおいては、グローバルなリスクの論理は産業社会の制度的限界と直面するようになる。

3 リスクの分配と保証の限界

リスク社会で支配的な論理となるのは、産業社会における富の分配と対照的に、リスクの分配である。富は人々が求める「財**bien**」であるのに対して、リスクは人々が避けようとする「悪**mal**」である。かつて公平な分配を求めたパイの中には、現在は毒

が混入している。毒入りパイの分配が問題になっている。しかしこうした毒入りパイは簡単に見つけることができない。近代化のリスクは直接目に見えるものではない。それははじめは知識として現れる。例えば、近代産業が生み出した大気汚染、水質汚濁、放射能、光化学スモッグ、地球温暖化、酸性雨、オゾンホールは、汚染が致命的な状態で人体に影響を及ぼすまでは、いずれも日常的な感覚によってとはとらえられない。これらのリスクを認識することができるのは科学の概念や理論、道具を用いることによってである。つまりある程度の科学的な知識や情報を持っているという条件でリスクを認識することができる。リスクは日常的な感覚によってとはとらえられず、はじめは科学的な「感覚器官」によってのみとらえられる。

リスクの認識はその知識の保有を前提としている。しかし、リスクはその知識の生産や流通の過程で加工されたり、誇張されたり、あるいは過少評価されたりする。その限りでリスクの定義づけと評価は科学が独占できるものではない。危険が一般に知られるようになるためにはマスメディアなどで取り上げられる必要がある。リスクをどのように定義づけるかという問題では、それを定義づける手段や権限をもっている地位、科学や法、メディアが社会的、政治的に重要になってくる。リスクは科学的に因果関係を測定することが困難であるため、科学的知識を備えた対抗専門家や法的な評価などより広く公的な議論にさらされる。専門家がたとえ確率は低いと評価しても、対抗専門家あるいは地域住民などが万が一事故が生じた場合の被害の大きさに危機意識を抱けば、そのリスクは発生の確率よ

りもさらに大きなものとして社会的に定義づけられる。その際、リスクの知識を独占せず、一般にそれを公開することが求められる。富の分配にとつて代わって、リスクの知識の分配がコンフリクトの争点となるのである。

ベックによれば、物質的財の配分などの富は目に見え、計算可能なものであり、しかも社会階級に対応する形で分配されていた。現在でもこうした産業社会の論理は決してなくなつたわけではないが、支配的になりつつあるのはリスクの分配とその不平等である。富はある特定の層によつて排他的に独占されがちであるのに比べ、リスク社会のグローバルなリスクは、確かにいくつかの階層や階級に集中するという不平等があるものの、潜在的にはリスクを生産する者もともにリスクにさらされる可能性をもっているという「ブーメラン効果」をともなっている。産業社会ではリスクと階級は関連しており、リスクにさらされる仕事はより経済的地位の低い層に割り当てられていた。しかしリスク社会においては、リスクと社会階級との関連は切り離される。というのもこれまでではリスクは主として労働災害、疾病など収入の減少や支出の増大をもたらすものを指していたが、グローバルで集団的なカタストロフをもたらすリスクは、富と同様に階級にしたがって分配されていた従来の産業リスクの定義づけには含まれないからである。富とリスクの分配はかつては重なり合っていたが、今やリスクの分配の論理は富の分配の論理から自律しつつある。したがって社会的コンフリクトは、階級を基盤にした富の分配をめぐる動員からリスクを記述し評価するための

知識を動員することによつてリスクをめぐる生じるようになる。リスクをどのように定義づけるかに依存するリスク状況は、もはやこれまでの階級状況とは一致していかないのである。

リスクはつねに何らかの意思決定に依存している。リスクは不確実性や危険を意思決定に転換することから生じるが、実際にはわれわれは不確実性を前にして決定することを強いられている。前産業社会の計算できない脅威（疫病や飢饉、自然の脅威、悪魔や魔術）は、道具的合理的コントロールの発展の過程で計算可能なリスクに転換する。近代化の過程はこのコントロールをあらゆる生活領域のなかで促進する。つまりリスクの合理的コントロールは個人の生活のなかにも浸透していく。したがって、自然であると見なされてきたもの（家族の規模や形態、子供のしつけ方、職業の選択、性別間の問題など）は、現在では社会的なものとなり、個人の意思決定に依存するようになりつつある。しかも実際には個人は決定することを強いられている。現行の産業社会の制度は、それまでは外部に起因していた危険を自己決定にもとづく計算可能なリスクに転換し、予測できなかったものを予測可能にすることによつて、個々人の存在の安定性を保障していた。しかし現在では、リスクはグローバル化し、時間と空間に限定されず、因果関係を特定することが困難であり、計算可能性と保障可能性を越えている。この可能性の限界づけが産業社会とリスク社会の時代的区別を明確にする。「リスク社会への突入は、現在決定された、したがって社会によつて生産された危険が福祉国家のリスク計算についての現行の安全システムの基

盤を揺るがし、また／あるいは無効にするときに生じるのである⁴⁾。

こうして、自ら生産した危険を通じてリスク社会へと無意識に変貌した社会は、保証可能性の限界を越えてかろうじてバランスを保っており、この保証可能性さらには安全性をめぐって生じるコンフリクト、つまり危険を生み出す従来のルーティンと結果や危険についての意識化との対立の地平を通じて、社会は自己批判的になる。

これらのコンフリクトは、リスクの知覚と評価が観点にもとづいて、制度間や制度内、個人の間ですら生じる相互批判的なものである。リフレクシブ⇨モダニゼーションは、カタストロフそのものが生じない限りで、産業社会を自己批判と自己転換の道へと進ませる反射作用と反省の結びつきである。リフレクシブ⇨モダニゼーションとは単に近代についての「反省」ではない。これは反省の増大に基づいているわけではない。反省はあくまでも二次的な要因である。ここで問題となっているのは、個人的な変化や自己限定についての意図せざる、しばしば目に見えない問題化という意味での「再帰性」である。産業社会からリスク社会への変化は、自律化した近代化のダイナミクスの過程で、潜在的な副次効果のパターンの上で「意図せず、目に見えず、強制的に」生じる。つまり近代化過程は、結果と危険に盲目でそれによって自らの基盤を崩壊させる産業社会と潜在的に対立する働きを持っており、リスク社会はその働きを通じて自動的に生まれるのである。したがってリフレクシブ⇨モダニゼーションとは、産業社会のシステムに適切に委ねたり、そこでは克服されることのできないリスク社会の結果との「自己対

立」を意味している。産業社会の発展の過程で意図せず生じた反作用の結果は産業社会の制度そのものでは克服できなくなる、そうした段階がリフレクシブ⇨モダニゼーションなのである。これはまず思いがけない反作用として現れる。こうした状況の次の段階で、今度、それは公的、政治的、アカデミックな反省の対象となりうるのである。

ベックのリスク社会の理論は、近代の発展の自己限定の問題を提起すると同時に、感覚的な知覚や想像力だけではなく、科学的な決定からも免れる潜在的な危険に関する、安全性や被害の測定、その責任などの従来の設定基準を再定義することを求める。それゆえ「近代社会は、それが自らを変えず、結果を反省せず、多くの同じ産業政策を実行している限りで確実に、それ自身の原理と限界に直面する」ことをこの理論はまさに指摘するのである。

4 リスク社会論の問題点

ベックの議論のユニークな点は、エコロジカルな危機を消極的にとらえて、単にそれを解決することを求めるのではなく、むしろこうした現象を新たな社会の出現の可能性としてよりアクティブにとらえようとしている点であろう。ベックは近代化の自己破壊性をベシミステイックにとらえるのではなく、かえってそれを歴史的变化の原動力とみなす。いわば産業社会の結果であるリスクが産業社会そのものの基盤を崩壊していく過程で、ベックは「リスク社会」

の概念を用いて「別の近代」の地平を切り開こうとしているのである。ところがベックは、富の分配の論理に対してリスクの分配の論理が支配的になりつつあるにも関わらず、われわれはまだ「リスク社会」に生きているわけではないと論じる。産業社会の論理にリスク社会の論理が新たに加わり、重なり合っているもの、産業社会にとって代わってリスク社会にもうなってしまうというわけではないのである。ここで、現代社会を「リスク社会」あるいは「リフレクシブIIモダニゼーション」というネーミングで特徴づけることへの疑問が現れてくる。ここではR・マーフィーとJ・W・アレクサンダーの批判を取り上げよう。なぜならマーフィーはベックの「リスク社会」の概念を、アレクサンダーは「リフレクシブIIモダニゼーション」の概念に関わる問題点を指摘しているからである。

R・マーフィーは、「リフレクシブIIモダニゼーション」などベックの議論の多くを認めながらも、現代社会を「リスク社会」と特徴づけることには異を唱えている。なぜなら、例えばもしリスク社会は人々が自分たちの将来について不安の状態に置かれているということと関連しているのであれば、ずっと以前の社会にもそうしたことはいくらでもあったのであり、何もわざわざ現代がリスク社会だと言う必要はないからである。むしろ現代社会を特徴づけているのは、現代に特有のリスクが持っている特性なのである。過去には、リスクは、自然環境にはほとんど影響を及ぼすことのない、あるいは部分的にしか影響をもたない社会的構成物と関わっていたが、こんにち人間が作り上げる物は地球上の生物を危険にさらしている。

現代のリスクは潜在的に生態系に影響を及ぼすグローバルなものである。現代はリスクのグローバル化とエコロジカルな影響こそが問題なのであって、個人化の過程によって個々人が置かれる「リスク状況」は重要なものではない。現代では、これまでとは違って、人間が作り上げる構成物が人間社会そのものに舞い戻り、破壊するおそれがある。自然環境の均衡を近代社会が崩しているため、自然過程と相互作用を行なう社会的行為の結果は、再びその行為主体に舞い戻ってくるという意味で、近代社会がリフレクシブであるということはマーフィーは認めている。しかし、階級社会からリスク社会への推移はない。リスク社会は過去にもあったし、階級社会はいまだに残っている。むしろグローバルでエコロジカルなリスクという新しい特徴は、階級社会の形式的合理化過程から生じたのである^①。

マーフィーは、とりわけベックの個人化過程の議論を受け入れない。階級が個人化にとって代わりつつあるという議論は、あまりにも単純化しすぎである。環境リスクは階級社会のあり方を変えはしたが、なくしたわけではない。むしろ階級は、リスクの経験の仕方に影響を与えている。また「新しい環境リスクは今度は階級が経験されるあり方を新たなものにしていく。環境リスクは、生活水準を下げ、消費と生活スタイルの外見上の民主化をひっくり返し、教育のアクセス可能性を減らすおそれがあり、また環境上の負債の遅延した支払が法外なものになり、他の福祉への金額が少なくなるために、福祉国家を財政上破綻させるおそれがある。したがって環境リスクは、豊かな社会の基盤を崩し、個人化に侵入し、新しい連帯を

生み出すと同時に人々を古い連帯（人種的、民族的、宗教的、性的、国民的、階級的アイデンティティ）へと後戻りさせる」^⑧。環境問題を引き起こし、利益を受ける階級はこれまでと同じだけれども、犠牲者は、汚染産業の労働者と消費者、無知な傍観者、将来の世代という形で分割される。マーフィーによれば、エコロジカルな問題は、階級を解体するのではなく、新たな「環境階級」を生み出しているのである。ベックはリスクは目に見えるものではなく、はじめは知識としてしかわからないと言う。確かに、「多くの潜在的に有害な結果は直接すぐには経験されない。本を読んだり、深刻な問題を知らせるテレビやラジオを見たり聞いたりすることを通じて科学的知識にいくらか親しんだり、知識のある人々と接したりすることは、DDTやPCB、CEC、ホルムアルデヒドなどの危険に気づくときでさえ必要とされる」^⑨。このようなリスクの知識への依存性をベックは次のように定式化している。「階級位置では存在が意識を規定するが、リスク位置では反対に意識（知識）が存在を規定する」^⑩。しかしそう言いながらもベックは環境上の経験が意識へもたらす効果を控え目に述べている。しかし、「あまり教育のない人々は裸眼には目に見えない長期的危険の意識をそれほど持たない傾向がある」^⑪。環境の悪化による最も深刻な犠牲者は、抗議運動に向かったり、参加したりするとは限らない。階級は意識やコンフリクトに還元されるのではなく、むしろ利潤の客観的確率と財やスキルのコントロールが階級意識やコンフリクトに影響を与えるのである。したがって、「環境階級は、浪費の蓄積と環境破壊から利潤を得て、それに貢献

し、その結果として犠牲になる客観的確率に基づいている」^⑫。環境悪化の貢献者と利益者、そして犠牲者の関係は、自然環境を媒介として、時間空間の離れた社会関係である。確かに、ベックが「ブーメラン効果」と呼んでいるように、環境悪化を通じて利益を得る者も荒廃した自然環境の中で暮らさなければならぬし、環境悪化の犠牲者も仕事や低価格の商品を通じて利益を得ている。しかしそれにも関わらず、利益と犠牲には程度の差がある。ある階級は、自然環境の搾取に貢献しており、そこから他の者よりもずっと多くの利益を得ているし、またある者は自然環境の悪化によって他の者よりもずっと多くの被害を受けている。マーフィーは、エコロジカルな問題によって個人化が進行するのではなく、むしろ階級構造が新たに変容しつつあると考える。こんにちの社会では、ポジティブな威信を持つている社会階級とネガティブな威信を持つている環境階級が密接に平行しているのである。

階級についての問題に加えて、さらにリスク意識についても疑問が投げかけられている。例えばアレクサンダーのベック批判は、客観的なリスクの発生とリスクの知覚の間にあるタイムラグに関わっている。アレクサンダーによれば、ベックはリスク意識の増大について客観主義的な立場をとっている。ベックは、産業社会からリスク社会への推移の過程で、階級意識が無くなっていく一方で、リスク意識が増大していくという。物質的欲求が満たされると、今度はリスクについての関心が高まっていく。「リスク意識と積極的行動は、暮らしを立てることにたいして直接の圧力が和らげられるか妨

げられるところで起こりやすい^⑩。産業社会の初期段階では、貧困がとて大きな問題であったので、人々は富の生産によって生じるエコロジカルな結果よりも富をどのように生み出すかに専念していた。最低限のレベルの富が達成された後でのみ、リスクに注意が向けられるのである。リスクとその知覚のタイムラグについてのこのような説明は、物質的な快適さが生物学的な健康や環境上の快適さに「自然に」また「自動的に」優先するということを前提としている。また、さらにそれは一度富が達成されるとリスクの知覚が社会的に媒介されずに働くということを前提としている。しかし、物質的欲求が満たされれば、自動的にリスク意識が生じるかは疑わしい。アレクサンダーは、ベックの説明はリスクとその知覚との間に媒介する文化的変数を軽視していると指摘する^⑪。ベックがリスク意識の増大に必要な文化的な要因を軽視しているのは、彼の理論が客観主義的な傾向を持っているからである。彼にとってリスク社会は客観的な社会的事実として現れているのであり、それは技術科学的発展そのものから意図せず、自動的に生じたのであって、より広い文化的な枠組には媒介されない。ベックは、マスメディアの情報が目に見えないリスクの意識を自動的に表わしていると考えているようである。ベックは一方でリスクについて盲目的な市民が自らの判断の自律性を取り戻すことができるのは、文化的な目を持つこと、つまりメディアを通じて獲得されたリスクの知識によってであると論じているながら、科学的な論議とその批判がなければ、産業社会の批判は不十分であるとみなす。現代のリスクとその知覚の間に介入するの

は、結局は、科学的な客観的知識そのものであるとベックは考えている。実際に、科学的知識がなければ、科学の応用によって生み出された批判の対象を知覚することさえできない。ベックは結局はリスクの客観的な知覚の合理性へと舞戻っていく。アレクサンダーは、このようなベックの「再帰的科学化」を認めない。リフレクシブIIモダニゼーションは、産業社会が意図せず生み出したリスクによって、社会が無意識に、不可避的に、さらには自動的に変化する過程を表わす概念である。その過程は一種の反作用として生じるのであって、文化的な要因が媒介する余地はない。しかし実際には、ベックは一方でリスクについての一般の意識におけるタイムラグを認めており、それを埋めるために、マスメディアを通じて獲得される「文化的な目」のようなその場しのぎのカテゴリーを導入して、理論的に矛盾した仕方で経験的なギャップを埋めようとする。アレクサンダーが求めていることは、「より理論的に一貫した仕方でタイムラグの問題を取り入れるために、ベックは彼の説明図式によりはつきりと文化的変数を導入すべきである^⑫」ということである。以上、マーフィーとアレクサンダーのベック批判を検討することによって明らかにになったことは、まず、個人化の過程が解体しつつあるという議論には単純化の危険があり、また、リフレクシブIIモダニゼーションの過程に文化的な要因を含めて考える必要があるということである。確かに、こうした批判を考慮すると、ベックの説明図式が不十分で補完的な議論が必要であるという指摘は適切なものだと思う。最後に彼らの指摘を考慮に入れた上でベッ

クのリスク社会あるいはリフレクシブモードニゼーションの理論をさらに発展させる可能性について考えてみたい。

5 連帯個人主義の可能性

アレクサンダーがとりわけ強調しているように、客観的リスクとリスク意識とのタイムラグには文化的要因が介在している。リスクは避けるべきものと見なされる限り、それは否定的評価が下されているのであって、単なる客観的確率には還元されえない。リスクの意識とその定義には規範的含意がともなっている。したがって、リスク意識の発生は、自己と他者との関係、あるいは人間と自然との関係を問題にする規範的枠組に依存する。環境運動家とエコロジカルな関心をそれほど持たない普通の社会的行為者との間の大きな違いは、「道徳意識」をもっているかないかの相違である。エコロジカルな問題において普通の社会的行為者に求められるのは、自然環境を悪化させないための日常実践のなかでの道徳的な意識と行為である。環境運動家はその意識が非常に高い一方で、他の多くの人々はそれに無関心である。もともと、この意識はエコロジカルなリスクの認識を通じて増大しようと少なくとも環境運動家は信じているであろう。しかしながら、この差を埋めることは容易なことではない。また、たとえリスクを認識するために科学的な手段が必要であり、対抗専門家やメディアの役割が重要なものだとしても、なぜ、どのようにして、彼らがリスクコンフリクトに動員されるのか、そ

して一般の公衆はそれをどのように支持し、あるいは無関心のままにいるのかという問題は残っている。グローバルなリスクに無関心な人々は、まさに個人化の過程を経て、自分勝手なエゴイズムへと向かっているのだろうか。しかしながら、一方で、ここ最近では逆にボランティア活動など「公共的な活動」への関心とその参加者が増大しているという現象がある。個人化の過程が進行していくなかで、他者への奉仕や自然の保護はいかにして可能なだろうか。われわれは、ここでは、個人化過程の議論をより楽観視するパーキングの「連帯個人主義」もともと彼をこれを実験であることとわっているが、この構想に着目することを通じて、「リスク社会」の理論を補完することを試みてみたい。

パーキングの連帯個人主義の出発点は、要するに、人は自己実現や職業上の成功、個人的自由の拡大など自己に関連した価値志向を見いだすほど、彼は彼自身のライフスタイルにたいする利他的規範の重要性を強調するというものである。つまり、パーキングは、逆説的であるが、最も個人主義的な人は、他者を助けることをもまた最も評価しやすいという前提に立っている。個人化の過程を経て、人々は階級や家族などの拘束から解放されるにいたり、個人は自分のライフスタイルを自ら反省的に選択しなければならない。しかし彼らは全く孤立した形で生活を送るわけではない。彼らは今度は似たようなライフスタイルを持った人々と集団を形成するようになる。この類似したライフスタイルに基づいたネットワークの形成をパーキングは「ポスト伝統的共同体化」と呼ぶ。これはまず、個々

人が反省的に選択した上で参加するという意味で伝統社会の共同体とは異なっているし、また、これは同じ物質的利害や富を追求するものではないので、初期近代で形成された階級など利害集団とは異なる。この集団はこれまでのように帰属や利害関係に基づいて制度的に形成されるのではなく、同じ意味世界と実践に基づいて非制度的に形成される。このようなポスト伝統的共同体化は個人主義と集団帰属の空白を埋める役割を果たすことになる。個人化された個人は、孤立化していくというよりもむしろ、逆説的であるが、贈与交換や社会的抗議、ボランティア活動のような連帯的な社会的実践を強化する方向へ進んでいる。現代社会の広範囲に及ぶこうした他者に関する行為は、伝統的な社会の遺物ではもはやなく、現代の文化的条件によって生み出された「連帯個人主義」の産物なのである。

パーキングによれば、市場の論理をいまだにのがれているごく普通の日常的な社会实践と相互作用の形式に注目するならば、われわれは市場に支配された関係と市場に支配されていない社会関係、等価原理と互酬原理、あらゆる接触の契約的条件と非契約的条件を厳密に区別している。後者は、愛や友情、信頼、連帯、共感や思いやり、慈悲、すすんで犠牲になったりするような関係、承認に基づいた関係を作り出し、安定化するために用いられる規範的、価値関連的志向を特色とする。これは他者への関係が単に戦略的相互作用には還元されない規範的、情緒的能力である。実際、形式的な経済に還元されない私的な贈与経済やボランティア活動などの領域のここ二十年の間の拡大は、人々がこの種の社会関係を今だに手放してい

ないということを物語っている。こうした現象は、現在まさに拡大しつつあり、またそれは個人主義の経験を越えて行為している人によって生み出されているのではなく、その経験に基づいて生み出されている。彼らは個人化に関わらず、あるいはまさにそれゆえに連帯的な社会関係や互酬の規範、相互承認の形態を求めているのである。

こうして、個人を分断化するのではなく、ライフスタイルにもとづいて再組織化することを可能にする個人化過程の文化的特性は、個人主義と集団帰属の蝶番である共同体化の上で、新しい種類の集団性を生み出す。これまでの強制は制度的に拘束するものであったのに対して、今ではそれは反省的な共同体のなかで正当化される規範的な拘束である。反省的な個人が関わるポスト伝統的共同体化のなかで課せられるこの新たな強制は、エゴイズムにたいする防波堤の役割を果たす。個人化の過程を経て制度的拘束から解放された反省的な個人の選択は、自由になされるのではなく、新たな規範的強制へ個人を拘束し、押し進める仕方です。すでに文化的に構造化されている。ポスト伝統的な共同体化は、個人化された個人がライフスタイルの類似性にもとづいて新たな連帯の形態を形成する場となる。しかもこれは従来の制度化された組織の外部で形成される。個人化の過程の結果、親密さが減少するにつれて無関心が増大する一方で、このような高度に統合され、道徳的に過熱（オーバークヒート）した、密集地帯が生まれる。個人化された社会的行為者は、この道徳的に過熱したライフスタイル類似集団の緊密なネットワークに集結

する。ライフスタイルは、行為者の主観的で集団に関連した意味の構築をともなっている。彼らはこのライフスタイル集団の中で現実を構築し、共通の意味を付与する。したがってライフスタイルによって個人化の強制は非個人的に扱われることが可能になり、また同時に典型的なライフスタイルを備えた者は個人を表現することができ。ライフスタイルは、彼が何者かであり、また彼が孤立する必要はないという二重の祝福を個人化された個人に与えるのである。

バーキングは、社会的な一般化の傾向をもつこのサブカルチャー的なライフスタイル集団、道徳的な過熱地帯が与える意味付与は、ますますエコロジカルな問題の方向へ進みつつあると論じる。自己と他者、社会と自然とのこれまでの関係はライフスタイル集団のなかで問い直される。こうしたネットワークのなかで、エコロジカルな危機にたいする集団的倫理的な反応に必要とされる文化規範が形成され、ライフスタイル集団はそれをさらに拡大することを求めるのである。「もし熱帯林や自動車交通が私の健康にとって何を意味するかを知っていれば、もし愛と友情、共感や思いやりがどのように生じるのかを知っていれば、もし私が自然に権利があると考えて、その権利を守る義務を自らに課すならば、そのとき考慮されているものは、あらゆる功利主義的動機にも関わらず、私自身の共有された価値の共同体にはもはや限定されない拡大された連帯である」^⑩。今や伝統的なものとなった行政政治システムに対抗するのは、反省的なライフスタイル集団が主体となったサブポリティクスである。このようにして、ベックの言う個人化の過程は、新たな集団的

な政治の基盤を形成する。政治は今や政治システムの独壇場ではなく、その外部に舞台を移している。このような非制度的に形成される「サブポリティクス」の文化的基盤を構成するのがバーキングの「連帯個人主義」なのである。

6 おわりに

マーフィーが指摘するように、確かに損害を多く被る可能性と環境意識の増大は必ずしも重なり合うとは限らない。なぜなら環境階級は決して動員された階級ではないからである。一方アレクサンダーの指摘にもあるように、ベックの議論では文化的要因が軽視されている。前の章で見てきたように、バーキングの「連帯個人主義」の理論はマーフィーとアレクサンダーによって指摘されたベックの議論の問題点を補完する働きをもっている。すなわち一方でそれは、エコロジカルな問題への動員が環境階級にもとづくのではなく、むしろ個人化の過程を経たライフスタイル類似集団にもとづいているということを示している^⑪。また他方でそれは、個人化の文化的特性が近代化の副次効果として生み出されたリスクにたいする意識を増大させる規範的枠組を構成する。このように、バーキングの連帯個人主義は、とりわけ産業社会の制度的な次元の変容を主に問題にするベックの議論にたいして、リフレクシブIIモダニゼーションの文化的次元を扱うことを可能にするのである。

リスク社会論は、「リスク社会」というネガティブな問いの立て

方にたいして「連帯個人主義」というポジティブな答えを見いだす。エコロジカルなリスクと個人化の過程は、制度的な保証可能性を越える一方で、新たな連帯の形式が見いだされ、制度の外で、自己と他者、自然と社会についての規範的な枠組が構築される。産業社会の制度的限界とリスク社会の出現は、個人化の過程を経たライフスタイル集団が形成され、グローバルなリスクの保証不可能性が意識化されることによって明確なものになる。リフレクシブ・モダニゼーションにおけるエコロジー問題を考えることは、産業社会がコントロールできるとみなされてきた自然の反射作用の現象について考えることである。リスク社会論にしたがえば、われわれは阪神大震災という近代化の「反射作用」の現象に直面した。今度はこの経験を通じてわれわれはさらに「反省」を深めなければならないだろう。

注

- (1) 「リスク社会」は、社会が生み出したリスクによる社会そのものの自己破壊性と自然の荒廃状態が歴史の起動力となりつつある社会である。「リスク」と「危険」との違いは、損害を受ける人自身の自己決定にもとづくものと外部に起因するものとの相違である。例えば、前産業社会のように自然災害を人間の手の及ばない神や魔術のせいであると考えられるならば、それは危険と呼ぶことができるが、人間社会のなかで行なわれた数々の決定の総体によって引き起こされたものであるならば、それはリスクと呼ばれる。
- (2) 例えば、P・L・バーガー・I・ルックマン(一九七七)『日帯世

界の構成』(山口節郎 訳)新曜社。とくに第一章「制度化」では、バーガー・ルックマンは、人間が他の動物種とは違って、世界開放的な環境のなかにあることを強調することによって、社会文化的形成物は人間の自然環境のなかで与えられるのではなく、人間自らが作り出したものだという。彼らは人間が自然環境にたいする柔軟性をそなえていることを際立たせるさいに、自然環境が可塑的なものだとして暗黙に前提している。しかしながら自然環境もまた、エコロジカルなリスクのように、自己にはたらしかけてくる環境の力への反応という面で、測り知れないほどの柔軟性を備えていることを彼らは見落としていた。

- (3) Beck, 1996. 「リフレクシブ・モダニゼーション」の概念は元々はベック自身が提起し、ドイツ国内において議論を巻き起こしていたが、ここ数年はギデンズやラッシュなどイギリスの社会学者も関わることによって、その理論的影響はドイツにとどまらず、ヨーロッパ規模で広がっている。この三つの原理は、したがってギデンズらも共有している考え方である。
- (4) Beck, "Risk society And The Provident State", in: S. Lash et al. 1996, p.31.
- (5) *ibid.*, pp.27-43.
- (6) Murphy, 1994, p.251.
- (7) *ibid.*, p.188.
- (8) *ibid.*, p.186.
- (9) Beck, 1992 a, p.53.
- (10) *ibid.*, p.53.
- (11) *op. cit.*, p.170.
- (12) Beck, 1992, *ibid.*, p.20.
- (13) Alexander & Smith 1996.

(14) *ibid.*, p.256.

(15) Berking, 1996. "Solidary Individualism". in Lash et al. pp.189-202.

(19) *ibid.*, p.201.

(17) このコンテキストは「環境」の形成を意味する。例として、Eder, 1993. 参照。

参考文献

J. C. Alexander & P. Smith. 1996. "Social Science and Salvation: Risk Society as Mythical Discourse". *Zeitschrift für Soziologie*, 1g.25. August, S.251-262.

U. Beck. 1987. "The Anthropological Shock: Chernobyl and the countour of the Risk society". *Berkeley Journal of Sociology*. vol.32.

1982. " Folgeprobleme der Modernisierung und die stellung der soziologie in der Praxis". *Sozial Welt*. sonderband 1.

1992a. *Risk Society*. SAGE.

1992b. "From Industrial Society to the Risk Society: Question of Survival. Social Structure and Ecological Enlightenment". *Theory, Culture & Society*. vol.9.

1996. "How Neibours Become Jews: The Political Construction of The Stranger In An Age of Reflexive Modernity". *Constellations*. vol.2. no.3.

U. Beck, A. Giddens & S. Lash. 1994. *Reflexive Modernization*. Polity Press.

K. Eder. 1993. *The New Politics of Class. Social Movements and Cultural Dynamics in Advanced Societies*. SAGE.

S. Lash et al. 1996. *Risk, Environment & Modernity. Towards a New Eco-*

ogy. SAGE.

R. Murphy. 1994. *Rationality & Nature. A Sociological Inquiry into a Changing Relationship*. Westview Press.

Risk Society and Ecological Problem.

Eiji KAWANO

The concept of "Risk Society" that a German sociologist Ulrich Beck proposed is capable of explaining the relation of the modernisation process to the devastation of nature. According to Beck, the logic of distribution of risk is dominating in a contemporary society in place of the logic of distribution of resource. In the risk epoch, the global risks which the consequence of modernisation unconsciously produced are threatening the institutions of industrial modernity itself.

Beck's theory of Risk society is interesting and influential, but his theory has certain difficulties. He argues that in the individualisation process the social class is dissolving. But that is oversimplification. R. Murphy introduced the concept of environmental class in place of individualisation. And there is Alexander's critic that Beck fails to acknowledge a mediating cultural variable influencing the time-lag between objective risk and risk perception.

We discussed that solidary individualism which forms the life style group is cultural specificity in individualisation of the conduct of life. Berking's solidary individualism focuses on cultural formation in the course of individualisation which forms the new normative obligation, but not institutionally. The individualised individual participates reflexively in the post-traditional community in which ecological risk consciousness would be grown.

Key Words

Risk society, reflexive modernization, U. Beck, ecology, solidary individualism.